

江崎家旧蔵資料の謡伝書について

大山 範子

ワキ方福王流の江崎家旧蔵資料のうち、謡伝書類は、今回報告した『師伝書』と、下記の四冊（五種）である。

『謡之秘書』刊本、慶安五年刊（一六五二）

『筆次抄』写本、延享元年（一七四四）写

『素謡要略・伍音之次第』写本、天保十五年（弘化元年、

一八四四）（序）・写本、永正元年（二五〇四）

『謡曲閑言解』写本、（宝暦十四年（一七六四）以降）

これらは全点に書入れ等があり、書写・伝授状況が窺えるものもある。なお、『筆次抄』以外については、明石在住の能楽研究家横山柚人が、すでに戦前に『能楽世界』に紹介をしている^{〔1〕}。以下、各書の書誌等を簡単に記す。

『謡之秘書』 大本（二七・二×十八・九）、袋綴、三二丁・十三

行書き、慶安五年（一六五二）花屋崑兵衛刊、焦茶色表紙（改装）、外題打付書き「謡之秘書」、初丁表に「江崎蔵書」朱印。

刊記等「此書当國武田大膳太夫殿に一人相傳旨より／外に是あるましく候観世家の秘密之書也／慶安五壬辰年九月吉日／花屋崑兵衛開板」

『謡之秘書』は、『八帖本花伝書』と並んで江戸時代に最も広く流布した謡伝書で、改版本も多いとされる。慶安三年刊本（半

紙本上下二冊、底本も異なる）が先行し、続く慶安五年本は刊者名のみ異なる三種（本文は同版らしく、共同での出版か）が確認されている。観世家の秘書というが、内容は謡伝書二大系統の観世・金春両系の説が混在する。

本書は、朱筆で誤字訂正や書入れが複数見られ、また、鼓の手の補筆もされている。

『筆次抄』 半紙本（二三・三×一七・四）、袋綴、四七丁、薄青色表紙、内題「筆次抄」、初丁表に「江崎蔵書」朱印。奥書「干時寛永十九 壬午菊月仲五／進藤以三二」、「寛保六つ^{〔2〕}の春の頃より予老路のつれ／を／慰せんと京師遊客元竹八木翁二よつて／謡曲を学ふ既に其数百番二およふといへとも／いまた奥意をきわめす 延享甲子の冬に至る／或時師此書を投して熟讀せよといふとりて／帰りこれを見れハ宮商角徴羽口舌心^{〔3〕}の蘊奥忽チ／闇夜にも燈火多たるニひとし しかはあれと切磋琢磨／のいまたいたらされハ例の引うす藝と成る 嗚乎／子房か一卷ハ漢家四百年基元竹の一卷ハつれ／の／睡をさます 萬事一夢の内これもまた善哉／ 皆延享元甲子臘月／室谷忠隣／南窓下書」

『筆次抄』は『筆の次』の別称で、ワキ方進藤流の進藤以三が、室町末期成立で江戸期に広く流布した謡伝書『塵芥抄』に解

説を付した書。『塵芥抄』から拍子のことや初心者理解可能な部分を除き、難解な箇所のみ説明している。詳細は、辻宏一氏の本文翻刻・解説³⁾によられたい。以三は、進藤流の始祖進藤久右衛門忠次の長男だがワキ方を継がず、京都で素謡教授を専門にし、多くの弟子を持っていた⁴⁾。伝本は、自筆本とされる琴堂文庫本・鴻山文庫本(甲)を含む写本十本が確認されている。

本書は書写奥書によると、寛保初期から稽古を始めた素人弟子が、謡の師匠から与えられたという。「室谷忠隣」と「元竹八木翁」について、および本書が江崎家に蔵されることになった事情は未詳である。『師傳書』もそうだが、こうした伝書のみならず、江崎家旧蔵資料の中には、謡の素人弟子の関与した書がいくつも見出せることを付け加えておきたい。

本文は琴堂文庫本とほとんど異同はないが、例に引かれる謡の文句に曲名が加えられている箇所、また朱筆の書込みと貼紙が複数ある。「聲」に「章」と傍書する箇所は多く、第三十八条「一、當るといふと入といふと心得有へし」(三三丁表五行目、三四丁表六行目まで)では、すべての「聲」の字の上に朱筆「章」が貼付られている。

『素謡要略』(『素謡要畧・五音之次第』) * 『素謡要略』

に「伍音之次第」を合綴。半紙本(二二・〇×一七・四、後半の

「伍音之次第」は二三・〇×一六・二) 袋綴、四二丁(うち後半一一丁)、薄茶色表紙・左上部に外題打付書き「素謡要畧」。

「伍音之次第」巻末に署名「江崎(花押)」。奥書「天保甲辰仲秋上院日/久枝茂喬誌」(素謡要略)、「右此十五之大事音曲秘事是也/右之一卷者於我等家音曲之奥儀也可秘々々/永正元年正

月吉日 観世道見 在判」(伍音之次第)

『素謡要略』は天保十五年(弘化元年、一八四四)、久枝茂喬の著。福王流の詳細な謡伝書で、上巻は「一調二機三声」「言語声音」「節奏」の三部構成。自筆原本かとされる鴻山文庫蔵本は、上巻冒頭の目録後に「大旨」、続いて『花伝書』『玉淵集』『奏曲正名闕言』の書名をあげて「此要畧書ハ花伝ヲ的トシ、玉淵中大略、闕言の宣ヲ揚」て「素謡ノ便ナラシム」ためと記す。

本書の前半は、『素謡要畧』の上巻「乾」。目録はなく、内題に続いて「大旨」があり、署名前の上記文言は欠くが、それ以外は文辞が異なる部分はあるが内容は同趣旨。ただし、奥付の季は「仲春」ではなく「仲秋」となっている。

本書の後半は、内題を『伍音之次第』とする別書。金春系伝書にみられる五音説(音曲口内六之大事)に、観世系伝書の特徴ともいえる十五種の曲説の名目と解説(音曲十五之次第)などを合写するもの。両説ともに永正年間には成立していたらしく、「宗節筆卷子本音曲伝書」(観世文庫蔵)を始め、室町末期以降の伝書には両説を併記するものが多い。本書は両説のほか五十音図を伴う五音相通説も掲載しており、観世道見に仮託された「永正元年観世道見在判伝書」(東北大学蔵)と同系統のもの(記述は簡略化されている)と考えられる。

『謡曲闕言解』 半紙本(二二・六×一五・七)、袋綴、三三丁、

外題「謡曲闕言解 全」、初丁表に「江崎蔵書」朱印。見返「千里必究/謡曲闕言解/平安龜陽子(朱角印「康文」(陰刻))、跋文の末尾に「宝曆甲申暮春 平安 岡康文識(朱角印「康文」)」

『謡曲閨言解』は、宝暦十年（序）刊行の『秦曲正名閨言』上巻の解説書。宝暦十四年（明和元年、一七六四）木田為邦撰で、京の本屋清八・錢屋忠兵衛の宝暦十四年刊本が流布している。

本書は、刊本の忠実な写し（匡郭・界線は略）だが、見返題と跋文末尾の署名が異なる（見返は著者名「木田六右衛門撰」が消され、刊者名は改変。跋文も「木田為邦」が「岡康文」）。本文には朱筆で句点や各項目の印、朱引きを施し、また余白に複数箇所の語句の注が見られる。興味深いのは、「（諸家）下篇」の章で五ヶ所（一三丁表〜一五丁裏）にイ・ホの記号を付している点である。順にイ「小次郎カ二子幼ナル北観世坐脇に乏シ因テ福王代テ脇トナル」、ロ「因テ進藤代テ脇トナル」、ハ「茂兵衛宗碩代リ継ク」、ニ「小川五郎左衛門堅斎ハ近江小川村ノ人ナリ」、ホ「竹村甚左衛門定勝ハ謡ヲ吉村七右衛門弓春ニ学ヒ」、いずれも脇や謡教授の系譜に係わる。これらの記号は注を付すためであったのだろうか、ホに続く「岸喜太夫」には、別紙注が貼付られている。

岡康文は、京都在住のワキ方高安流の岡治郎右衛門家の十二代千蔵（寛政十年（一七九八）没、享年六十五歳）。同家の伝来資料の大半は康文の手になるといふ。同家には文康筆の『秦曲正名閨言』の書き入れ入り謄写本が伝来するが、『謡曲閨言解』は現存しない。詳細は改めて報告したいが、本書の表紙は安永年間の岡治郎右衛門宛の反故紙を利用しており、元来は同家所蔵のものであった可能性が高い。

なお、本書には、横山杣人による田中允蔵の刊本の部分謄写（表見返しと本文冒頭半丁分、跋文の末尾半丁分の二枚）が添えられている。杣人は、冒頭に述べた紹介記事を書いた後、田中氏

蔵の刊本を借りて書誌的考察をし、さらに末尾二篇の翻刻を発表している。

注

- (1) 「樵日記」三五四〜三五七「江崎家の古書を一見（其一）」（其四）」、『能楽世界』第六〇六〜六〇九号、昭和十五年三月〜五月。
- (2) 書誌等については、全面的に以下の二書を参照にした。
竹本幹夫「室町後期・江戸初期の伝書とその特質」、『岩波講座能・狂言 II 能楽の伝書と芸論』（岩波書店、一九八八年）第四章）
- (3) 『鴻山文庫蔵能楽資料解題（中）』（野上記念法政大学能楽研究所編・発行、一九九八年）
- (4) 辻宏一「筆の次」（『資料紹介』）（『藝能史研究』七十八号、一九八二年七月）
- (5) 宮本圭造「進藤家の人々」、『上方能楽史の研究』（和泉書院、二〇〇五年）所収。
- (6) 田草川みずき「宇治加賀掾の浄瑠璃芸論『竹子集』序文と『塵芥抄』系謡伝書―進藤以三著『筆の次』との関わりを中心に―」（『近世文藝』八九号、二〇〇九年）
- (7) 石塚（藤岡）道子「高安流ワキ方 岡治郎右衛門家の系譜と資料（一）〜（三）」（『金剛』一〇六〜一〇八号、一九七九〜一九八〇年）参照。
- (8) 「『謡曲閨言解』の写本と刊本」（『宝生』昭和十六年六月号）、「『謡曲閨言解』の刊本を写して」（前掲書昭和十七年八月号）。